

## 「そうなんだ」では すまさない

私は、中学生の頃、県外から家族といっしょに福岡に引っ越してきました。住む家を探すために不動産会社を訪れた時、「A町の土地あたりは部落だから、こちらの地域の方が…」と言われました。

その話は唐突であり一瞬ドキッとしましたが、その時は「そうなんだ」としか思いませんでした。

今思うと当時の私は、部落差別について中学校で学習したものの、自分には関係ないと思っており、差別がどのようなものなのか理解できていませんでした。

### 差別落書き事件を知って

それから数年が過ぎ、就職活動をしていた私は、各自治体が作成している資料を集めていました。

その中の筑紫野市の啓発冊子から、2018（平成30）年に、市内の公共施設に差別落書きが書かれていたことを知りました。

その落書きが差別用語や「死ぬ」という言葉を何回も書いた悪質なものであったこと。それを見た同和地区の低学年の子が「私たち、死ななければいけないの。」と言って泣き出したこと。抗議集会の中で子どもたちや若者がさま

ざまに怒りの声を上げていることなどが、実際の落書きの写真と一緒にその冊子に掲載されていました。

### 市の職員になって

2021（令和3）年、私は筑紫野市の職員になりました。

そして、人権問題に関する研修を受けていく中で、差別落書きが発見された公共施設が、実は不動産会社から聞いた地域の中にあることを知ったのです。

そんな私は今年の7月末、とある研修会に参加しました。その研修会には行政職員だけではなく、学校の先生や市民の方などが参加しており、さまざまな人たちと意見交流をすることができました。

私はその中で、不動産会社の職員から言われたことやその時に「そうなんだ」と思っていたことを話しました。

すると、研修会に参加していたある方が、次のような話をしてくれました。

差別はね、厳しいものがある。人の生きる意欲を奪うし、人間関係を切ってしまうこともある。就職差別は安定した仕事を奪い生活基盤そのものを奪いかねない。差別

### 学ぶ機会を得て

その方の話を聞きながら、私は部落差別がどれだけ悪質で根深く人を傷つけるものかということが分かってきました。

また、不動産会社の社員の言葉こそが部落差別だということや、「そうなんだ」と素通りしてきた自分自身も加害者であったことに気がつくことができました。

私は、これまでの自分を越えていくために、今後も研修会や講演会に積極的に参加していきたいと思っています。それは、今回の経験によって、学びが成長のはじまりになるということを体感したからです。そして、多くの市民のみなさんがこのように学び合うことを大切にしていけば、差別のない社会は必ず実現できると考えています。

別はこのように生活の様々なところに、いろいろな形で表れる。「そうなんだ」と、軽く考えてほしくない。公務員は高い人権意識を持たねばならぬ特定職業従事者であるはず。もっと本気になって差別のことを考えてもらいたい。

私は、差別落書きを見て、「私たち死ななければいけないの。」と言った子を6年間ずっと見続けてきた。もしかして差別に負けてしまうのではという不安の中でも、差別に立ち向かう子になって欲しいという願いをもって、今も見守り続けている。

その子どもたちと保護者が、ある学習会でステージに立ち、何百人という人たちに向かって差別のおかしさを訴えた。

差別落書きは決して過去のものではなく、今も子どもたちは立ち向かっていることを理解してほしい。

この場にいる市の職員や先生方は差別をなくしていく責務があるはず。「そうなんだ」というような軽い話で受け止めて欲しくない。もっと自分のことと思って真剣に考え、部落差別に対する認識を高めていってほしい。

